

## 大会衆門

「先生待つていました……」

何ヶ月か前に涙で別れた峠の麓で、今日は待ちにこがれたあなたのお出迎えを受ける。嬉しい、なつかしい。見るものが皆なつかしい。田の景色も、山の形も来る度に変つてゐる。山も川も、道の小草も、笑みつつ私を迎えてくれる。

「先生待つていました。」

包んでも包んでもつつみきれぬ笑顔がこぼれる。涙さえにじむ。

青年諸君はもちろんのこと、おばあ様にも、おじい様にも、知り合いが多い。続々と親しいお顔が座敷にあらわれる。お念仏が皆様のお口から出る。

これからいよいよ講演会の幕は切つて落される。初めて来た時には会場の前が歩いて後につめかけていたものが、近頃は演壇の周囲へ周囲へと集つて来る。一言でも一句でも聞きもらすまいという緊張した空気が会場一ぱいにみなぎる。

演壇に立てば、一里、二里、時には数里の遠方から来られた同胞のお顔が見える。どうして真剣になられずにいられようぞ。

「問いたいことが山ほどありましたのに、先生のお顔見ると何もなくなつて胸が空になりました。困りましたなあ。」

平素、友達が集つて修養や、信仰の話が出る。つい議論になる。問題は未解決のまままで別れてしまう。今度先生に会つた時には問おう。日によると仕事をするまま深い考えが胸に浮んで、田に立つたままぼかんとしているような時がある。わからぬことが胸に一ぱい出来て、また悩みはじめる。

昔はあなたが何も考えないで、時間におされ、仕事にせきたてられて、無意味に動いていた。その平和な胸中へ「道を求めよ」の爆弾をなげこまれた。昔のように何も彼も、平凡に見ていることが出来なくなる。一口でも長者の言うことが耳にとまる。世間の出来事についても考えて見る。自分の毎日の生活にも種々なる問題がおきてくる。道を求めて行く者には何時も種々なる悩みや不審が続く。宗教の書物も読む。説教や、講演を聞くと、自分の考えていたことが打ちくだかれることがある。

こうした種々なる問題が山ほどある。今度先生に会つたら聞こう。ここをんと味わおうと考えて、指を折つて待つてゐる。いよいよその日が来て、今日から講演となる。

「先生お問ひすることが全部なくなりました」

どうして解けたのだろう。鎖された胸がどうして開いたのであろう。

「先生今日講演後、僕の友人をつれて来ます。近頃妙な人生観を持つています。言つてやつてくれませんか」「先生。これは私のお友達なのでございます。近頃お母様を失いなさいましたので大楽悲観していられます。話してあげて下さい。」

あなたの優しいお心から、今まで私の知らなんだ兄弟をつれて来て下さる。

「先生、僕は友達に誘われて来ました。僕は宗教なんてつまらぬものだと思います。説教なんか聞いていると馬鹿らしくして仕方がないです。」

「なるほど」

「死なんて考えることは僕は嫌なんです。」

そろそろ宗教心のきぎしがちゃんと見えてくる。この青年は宗教を否定しつつ、実は胸の底にある力が動き出そうとしているのが見える。

「死んで未来なんかがあつてたまるものですか。」

「ここまで聞くとすっかりわかる。この声は未来を要求する者の声なのだ。」

「ではお聞いします。あなたは過去でも現在でも君が一番、偉人だ聖者だと尊敬しているのは誰です。」

「それは、釈尊やキリストです。」

「君が一番卑んでいる人物がいますか。」

「います。」

「ではそれら様々の人の明日が、未来が、みな同一であるか。一生他人を傷つけ、悪魔のような日暮しした男も、大聖者も、死の彼方は同一でもいいのですか。君の生命は、君の純情は、そんなことを要求し、そんなことを許し、そんなことで満足しますか。」

青年は深く考えこむ。そしてきつぱりと

「そんなことでは満足出来ません。僕は考えて見ねばなりません。」

こうした低いことから段々と進むと、その胸が真暗になる。悩む。ここに道を求める青年がまた一人出来る。

あなたのみ口から恥しそうに

「先生、私は母を失いました。今一度母にあいとう御座います。どこかに母がいる気がします。母に会うことが出来ましようか。」とやつとそれだけ出る。

高きも低きも、誰もが持つ、悲痛なる純情の発露である。こんな真剣な、全我的な要求を、誰が「諦めよ」と教えるものぞ。厳粛なある空気が皆を圧する。

消そうとして消し得ざるこの幻影、

止めようとして止め得ざるこの至情、

人の道はここに開いて来る。粗末にしてはならない。こんな人間苦に迫られた時ゴマ化して行けば、一生道に入る機縁がなくなる。

「会われますとも会われますとも。」

一縷の光明がきつとお顔に輝く。二日たつ、三日たつ、あなたの魂は、光明界で母上とお会いするようになる。やがては母を失った悲しみをそのままに

「母が死んでくれましたらこそ、こうした私になりました。」

と外の世界では味えぬ感謝が生れて、お母様の死が単なる無意義なる死ではなくなる。

「先生、私は昨年、子供が死にました。思いあきらめようとしても、あきらまされませぬ。泣くなと言われても、泣かずにはいられませぬ。」

お母様のお眼からは涙が流れる。来る日も来る日も、死んだ子供のありし日の仕草がお母様や、お父様の涙の種、子を思う親のまことに変わりはない。何れの郷に行っても、こうした親の涙に一番よく出会う。そこから人の道が開ける。

はじめは、おそろおそろ近寄った老婆が、二三日の内にはもう心安くなつて毎日々々、講演後には来られる。お菓子を少し紙につつんだのを下さる。卵が三つ、懐から出る。赤い心をおし頂く。

「先生、お別れしてから後、御承知下さるような事情で、苦しい苦しい日がつづきました。でも先生が来て下さる日を、指折り数えて、苦しみの内にじつと堪え忍んでいました。」

そうでしたでしょう、そうでしたでしょう。よく待っていて下さいました。人間苦のどん底に立つて苦闘の数ヶ月に疲れたことでしょう。持つて来ましたよ、弱ったあなたを元気づける不可称、不可説、不可思議の靈藥を。

御案内申します。荒み果てた、人生という大沙漠。御案内申します、慈悲の水湧き出づるオアシスへ。

数日の講演、あなたの魂は力づけられて、又人間苦のどん底に立ち上つて行かれる。

「私は長い間、長い間、お寺参りを致しました。何度も何度も得た気がしたり、歓喜したりしましたけれど、どうもどうもこの機がとれませぬ。」

「おじい様、どうして有難うなろうか、どうしてはつきりしようか。安心がしたい、3くつろぎたい、信心が頂きたいに悩んでいるのでしょうか。」

難行雑修自力をはなれようとして、自力におち入つて困つているおじい様、一時間語り、二時間話している間に、不断煩惱得涅槃の極致にふれてゆく。

「先生。真実の一筋道を歩むことは、どんなに苦しいことで御座いましょう。この辺りの青年は全部、目覚めないでいます。そうしてそれらと一緒に暮さねばならぬことは堪えがたいことであります。」

青年団の倶楽部に集る青年たちが、卑猥いやしい話で夜を更かす。それらの青年の机の上には、修養雑誌も、信仰書の一冊もない。手にせられる書物は、流行歌の豆本か、低級な講談本くらいなものである。あなたはもうそれでは満足が出来ない高級な世界に出されてしまつて、それでは満足は出来ない。あなたの信仰に燃え、無上正真の一道をたどろうとする魂は、白道上を真一文字に突進する。

目覚めたものは悪意の攻撃を受ける。迫害に会う。異端者として排斥せられる。多数、集会の席上で

「おい信心者が御出でたぞ。……菩薩が御入来じゃ。」

骨に徹するような皮肉な言葉があなたの耳に入る。あなたは悪意はなくとも自然とそれらの仲間と親めなくなる。そうしてあなたは尊敬すべき孤独になつてしまう。そうしてあなたの寂しきは幾度も私のもとへ手紙となつて私を泣かす。苦しいでしょう。寂しいでしょう。寂しい者は寂しい者に通ずる。そうしたあなたこそ私の唯一の友ではないか。

「あなたは、低級なる平和、安価なる楽天で暮すのが幸福なのか。苦しくとも目覚めて生きようと言うのですか。生きているのは、誰にも彼にも賛成してもらつたり、目覚めない人と妥協しようとするためではない。真実に生き、目覚めて生きてゆく、無上正真の一道を精進させて頂くためではないか。」

あなたに新しい力が湧く。でも心配すな。あなたの後の御手紙には、無二の親友が出来たという。真実の道、信仰の友なら一人でもいい。酒食の友が千人いてもあなたの向上には何にもならぬ。真実は真実に通ずる。あなたに一人の友も与えられぬほどこの世界は浮いたものではない。誰がいなくても、こうした真剣な青年を、どうして私が棄てようぞ。あなたのお口からも念仏が出る。私の心にも念仏がたぎる。

嬉しいではないか。講演の最初日、聴衆が少い。二日目からふえる。青年が聞く気がないように見える。けれども真剣に話していると青年が一人立つ、二人聞く気になる。三人悩む。四人、五人出来れば、もう楽だ。真剣に叫ぶ声が人の心に何等の響きも、共鳴も与えないで消えるものか。如来の威神力はそんなに無力ではないなさらぬ。どこの里に行つても人はおきる。煩惱の石油のあるところ、如来の靈火がつかぬことはない。

青年には宗教心がないという。私もそうかと思つていた。けれどもこの考えは根底から覆された。一番求道に燃えるものは青年である。真の宗教の天地は若い青年男女の胸にこそ開く。老人でもよい。壮年でもよい。子供でもよい。男でもよい。女でもよい。子供には子供の道がある。老人には老人の道がある。男には男の道、女には女の道がある。誰も食事なくしては生きられぬ。道を求めるのは魂の空腹である。老人に与えられる食事がなくていいだろうか。若者の強健なる腹にかなう食物がなくてよからうか。信仰は一切人に与えられる食物である。

私は嬉しい。真剣に話す時、老人も立つ、青年もおきる。無宗教のところできえ、一度聞けばさつと新しい兄弟が出来る。二度行く、三度行く、きつと底からおきる。

「私たちは一体今まで何を聞いていたのだ。何をして暮していたのだ。」  
そうした叫びをあなたの口から聞くではないか。

「二年前には、地獄があるの、未来がないのと、幼稚なことを言っていましたかね。」  
青年の頭はずんずん進む。御聖教や高級な書物を読める頭が出来る。高い話でも理解し、味うことが出来るようになる。私がある間、毎夜々々、一時二時までも話はずんで夜が更ける。一つにとろけおうた温いあるものの流れた空気の中に、道の話がずんずん進む。夜が更け時間のたつのがわからない。二年前のあなたとは言われぬよう違つた人になる。三人五人真剣に真面目に考えてくれる青年の群が出来ると、その地方の空気が一変して来る。こうした有様が各地に見られる。私は幸福です。至る所でこうした色彩を作らされては、その中に生かされる。

眼をつぶつて各地の法兄法師の事を思う。浮彫のように、あちらにあの顔が見える。あの村に団歌の音が聞える。あの寺院の裏座敷に夜を徹しての座談の様子がそのまま見える。こうした一切の人たちの心のうちには信心の華が咲いている。

「光明徧照十方世界 念仏衆生攝取不捨」

「同一に念しかして別の道なきが故に、遠く通ずるに四海の内みな兄弟とするなり」  
そこに一切の溝や牆かきのとれた一如の世界が恵まれる。

三日間、五日間の講演がおわる。悲しい日が来る。毎度のように愛別離苦を深刻に  
味わねばならぬ。

「先生又何時来て下さいますか。早く来て下さいませ。」

「しつかりたのむぞ。皆な無事で、真一文字に道を求めて進むのですよ。」

ことわってもことわっても見送つて来て下さる人たちが、一緒に歩きながら、また  
も悩む胸をうちあけて真剣なる求道。あるいは自動車の出発を待つ間に、別れをおし  
みつつ、野原に坐つて最後の御相談したこともあった。

憶。情熱の子。胸から胸に流るる血潮、どうして切ることが出来よう。どうしても  
なれることが出来よう。人間の独りの運命をつなぐ力、それは万人の胸に湧き出づる  
如来廻向の慈悲の涙である。ここに大会衆門が開かれる。